

畑恵子先生に贈る言葉*Farewell Message for Professor Hata Keiko*

畑恵子先生は、1993年に早稲田大学社会科学部に助教授として着任され、95年から教授になられ、2019年3月にご退職されました。その間、国際コミュニティセンター長、社会科学総合学術院長を、さらには、私たちジェンダー研究所と深いかかわりを持つ男女共同参画、ダイバーシティ担当の理事を務められました。私たちにとってはこの上なくうれしいことでありましたが、それはご苦勞の多い日々だったのではないかと想像します。「役職者や管理職に女性を！」と申しますが、実際その立場に立つご苦勞も並大抵のことではなかったのではないかと思います。お忙しい日々であったと思いますが、ジェンダー研究所の研究会や講演会、シンポジウムに足を運んでくださり、一緒に準備をしてくださったり、時に受付にも立ってくださりながら、研究所の活動に力を尽くしてくださいました。

先生のご専門は、メキシコを中心としたラテンアメリカ地域研究、社会保障、権利研究です。私自身にとっては少し遠い地域であるラテンアメリカのご研究の一端に触れたいと思い、執筆された論文を改めて読ませていただきました。

1970年代からメキシコの農民組織や労働運動の研究を開始され、1997年に「官僚主義的権威主義体制とラテンアメリカ女性—1970年代半～1980年代半の民衆女性運動とフェミニズム」（『早稲田社会科学研究』（55）、1997-10、早稲田大学社会科学部学会）を、そして、ご退職直後に「性的マイノリティと人権—国際社会、日本、ラテンアメリカ」（大曾根寛、森田慎二郎、金川めぐみ、小西啓文編『福祉社会へのアプローチ—久塚純一先生古稀祝賀—』2019年5月、成文堂）を著していらっしゃいます。前者の内容は、1975年国際女性年

畑恵子先生に贈る言葉

に早稲田大学に入学した私個人にとって興味深いだけではなく、世界の男女平等を大きく展開させる契機となった国際女性年世界会議を開き、国連女性の10年を主導する起点となったメキシコで、当時展開されていた女性運動の様相を知ることができる貴重な内容でした。また、後者は、セクシュアルマイノリティの人権をめぐる近年の国際的な議論を踏まえて、日本とラテンアメリカ地域の現状と課題を丁寧に説き、2018年のラテンアメリカ地域のLGBTの権利保障へのバックラッシュにも言及されており、とても刺激的な論考です。

このような畑先生の研究成果を踏まえると、早稲田大学において取り組まれた男女共同参画推進や、女性研究者支援、ダイバーシティ推進の事業のリーダーとしての畑先生の姿勢が重なります。「マッチョ」と形容される早稲田大学において、これらの課題に大学内部の改革として取り組むということは、簡単でないことは想像に難くありません。保守的な認識の障壁、大規模組織であるが故の共通認識形成の壁が立ちただけで、それらを超えていくためには、時にシステムの改革までも必要とする場合もあります。そこに向かって、セクシュアルマイノリティ、女性、障害者、あるいは国籍や宗教等々多様な人々が学び働く場所として、どのような大学の在り方が望まれるのか、ふさわしい在り方はどうか問い続けながら、弛まず推進力として役割を担っていただきました。「ダイバーシティ推進宣言」の策定や「スチューデントダイバーシティセンター」の開設と、ほとんど何もないところから、組織の基礎、土台作りに貢献されました。おそらくもっと研究時間を持たれたかったのではないかと思います。が、その時間を多くの後進のために割いてくださいました。

ご退職によって得られた時間を研究に充てられるとすれば、これからの先生の研究成果から目が離せなくなります。

今回ここに贈る言葉を書かせていただくことになり、畑先生が切り拓いてくださった道をどう受け継いだらよいのか、ジェンダー研究所の役割は何か改めて考えていきたいと思います。言葉を尽くしても尽くしきれませんが、厚くお礼を申し上げます。